

アジア舞台芸術祭

参加者インタビュー#07

カキヤフミオさん（アートキャンプ受講生、50代）

学生時代、観客として劇場に足を運んでいたカキヤさんは、25年間勤めた金融機関を退職した後、大学院で平和教育研究に携わる中で演劇に再会しました。現在は演劇制作を実践的に学ぶため「こまばアゴラ演劇学校・無隣館」に所属しています。

これまでの海外経験から、多言語による舞台芸術—たとえば、さまざまな国の人々がそれぞれの母語で対話したり、複数言語での会話が同時に出現したりする、日本でも近い将来に日常となるかもしれない光景を切り取ったような演劇—の可能性を舞台芸術で追求したいと考え、アジア舞台芸術祭に参加しました。

「ラウンドテーブルでは『いかに芸術性と大衆性の均衡を保つか』という論点について、文化的・経済的背景の異なる各国の皆さんが、同じように切実な状況に直面していることがよく理解できました。一方で、国によっては言論について強い規制があるという指摘には、改めてハッとさせられましたね。

特に、“先進的な表現にチャレンジすることが芸術家の使命ではあるが、『芸術のための芸術』に陥ることなく、観客との対話を通じて芸術家・制作者自身も学ぶ必要があるのでは”というお話には、まさに目からウロコでした」

公開稽古から立ち会った国際共同制作ワークショップと上演会は、カキヤさんにとって、まさにそうした演劇の可能性を再認識するものでした。

「公開稽古の見学では、作品づくりの過程そのものがまさに多言語による対話の場だと感じました。短期間でかなりの進化を遂げ、本番ではどれも素晴らしい作品に仕上がっていたことには驚きました。

特に印象的だったのは韓国チームの『My Mom』。文化的な共通点・相違点の両方を見せつつ、先祖やふるさとを大切にする心、母を想う気持ちは共通している。自分の母親のことが思い出され、涙が止まりませんでした」

上演前日に聴講したチョン・ツェシェン氏（シンガポールチーム演出家）のレクチャーや、各作品の上演後に（作演出家が作品について解説する）アフタートークによっても、より深い体験ができたというカキヤさん。

一方で“国際共同制作の必然性”についても考えさせられました。

「登場人物の国籍が複数になれば、おのずと言語も複数になる。そういう点で国際結婚をモチーフにした『イリュージョン』や、ハノイに旅行した日本人が登場する『ハノイの幽霊』はいずれも多言語表現にふさわしい舞台だったと感じました。

その他、共通テーマとして掲げられた『米/稲～食生活の共通性と差異について』を“家族”という普遍的なテーマと共に表現しつつ、社会的メッセージも送ってくれた作品や、ダンスや音楽など言語以外の表現を巧みに使って満場の観客を楽しませてくれた作品もあり、それぞれに印象的でした」

また特別公演、特別レクチャーの質の高さも、カキヤさんに鮮烈な印象を残しました。

「矢内原美邦さん演出の特別公演『全事経験恋歌』（日本×台北の国際共同制作）は、国際共同制作のお手本のようなものでした。多言語で上演する意味がよく理解できましたし、映像表現によって観客の理解を助け、字幕に目をやる辛さも感じませんでした。
無垢舞蹈劇場（台北）の特別レクチャーは圧巻で、フィナーレを飾るのにふさわしい作品でした。会場スペースが限られていたのが残念、もっと多くの方に観ていただきたかった」

制作者として「今後は若い人たちの演劇づくりをサポートしていきたい」というカキヤさん。多言語を用いた舞台芸術の国際共同制作に自ら携わることに意欲的で、アジア舞台芸術祭は「自分にとって非常に有意義な機会だった」と振り返ります。

「多言語や、観客にとって母語以外の言語・設定で上演される演劇には、他者との差異や葛藤が明確に表現されます。それは観ている人の想像力によって自分とは異なる他者の声に耳を傾ける時空間でもある。

さまざまな対話のあり方を模索していく、二項対立ではなく対話を可能にする。演劇の力はそこにあるのではないかと思います」